

## 当科における深頸部感染症の臨床的検討

田中浩喜 兵行義 濱本真一 原田保

川崎医科大学付属病院 耳鼻咽喉科教室

深頸部感染症は頸部間隙に生じる感染症の総称であり、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域においては日常診療で時々遭遇する疾患である。その中でも縦隔炎にまで進展する可能性もあり、致死にも至ることもある。医療が発達した今日では減少傾向にあると報告されているが、糖尿病や免疫抑制剤内服を有する状態などの易感染性の基礎疾患を有する症例が多くなっていることから抗菌薬が発達した今日でも、深頸部感染症は重要な感染症として位置づけられている。そこで今回当院当科における深頸部感染症の実態を把握するため検討を行った。対象は1997年1月～2011年7月までの当院当科で深頸部感染症にて加療を行った80例（扁桃周囲炎／扁桃周囲膿瘍、頸部リンパ節炎を除く）に対して検討を行った。深頸部感染症の診断はCTによる画像での評価で行った。検討項目は性別、年齢、喫煙歴、基礎疾患（糖尿病等）、症状出現時から当院受診までの日数、感染の波及（舌骨上下）、外科的排膿の症例、治癒例等である。結果として男性49人、女性31人、平均年齢は54.9歳（2歳～98歳）であり、男性に多い傾向であり、発症のピークは50歳代であった。喫煙歴のあるのは29人（36.2%）であり、糖尿病の合併した症例は15例（約18.7%）であった。症状発現から当院受診までの平均日数は7.3日（1日～30日）であり、平均入院日数は18.2日（0～72日）であった。

また感染の波及が舌骨下まで進展していた症例は43例（約53.7%）であり、深頸部膿瘍から縦隔まで進展した症例は3例であった。切開排膿術（経口のおよび頸部外切開）を施行したのは57例（約71.2%）であり、そのうち気管切開を施行したのは19例であった。治癒例は78例であり、2例は死亡例であった。